



## 日本人のDNA

岡田 安弘

大阪人は人さまを笑わせるのが上手い。吉本喜劇の影響か、身につけていると言っても過言ではない。大阪の新型コロナウイルス感染拡大が止まらない。ならやまの朝礼で新入会員が「大阪から来ました」と自己紹介し笑いを誘う。

大阪府は緊急事態宣言を解除。早くも夜のキタやミナミの賑わいが戻り、ウイルスの活動が再燃する雰囲気醸している。笑い事では済まなくなるのではないかと心配だ。

振り返れば、このウイルスは大型クルーズ船が持ち込み、対応に追われている隙に欧州から流れ込んだ。わずか1年前のことだ。ワクチン接種の展望が開けた途端に変異種が現れ、なかなか出口が見えない。

私ごとを言えば、当初は他人ごとだに思っていた。米国で犠牲者が30万人を超えたあたりで目が覚める。第2次世界大戦の4年間の米国の戦死者(29・1万人)を1年足らずで上回り、脅威に息を呑む。トランプ前米大統領が風邪程度と見くびったことも、いかに初期対応が肝要か思い知った。

欧州も対応に苦慮、都市封鎖を繰り返す。犠牲者数は英を筆頭に伊、露、仏、スペインが不動のワースト5だった。平時から民間の医療機関がドライブスルーや自宅訪問などで備えるドイツは、感染症対策の優等生と言われる。しかし変異種に手を焼き、スペインを追い越した。

感染の抑え込みで独自の対策に取り組むのはスウェーデン。ウイルスと共存の道を選ぶ。個人の自由を重んじ、経済活動と日常生活を維持。研究者は「国民の多くが免疫を獲得し、感染は抑制された。患者や家族、医療従事者が差別されることもない」と言っていた。成果は見られたが、変異種の登場でロックダウンや国境封鎖を始めざるを得なくなる。

▽

因みに日本の死者は8千人台(3月19日現在)。対応の速さでドイツに一步も二歩も遅れながら、感染率、死者数とも桁違いに低い。

京都大学の山中伸弥教授は「ファクターX」と名付けて仮説を挙げている。「清潔好き、ハグや握手、大声の会話はしないなどの国民性が要因ではないか」と言う。同時に「ウイルスは私たちを試している。油断したところから一気に勢いを取り戻す」と警告も忘れない。

▽

日・独は、戦後の復興が類似しており、何かと比較される。イナ・レーベル駐日大使は日本記者クラブで、初期対応を振り返った。その録画を見ると、「専門家が頻繁に会見し警鐘を鳴らし続けた。政治サイドからの影響力行使がなかったことが、国民の信頼を得た」と話している。けだし名言だと思う。

経済支援は「労働の時短制度で、平時から減収の一部を政府が補填してリーマンショックを乗り切った。この経験を生かす」と言う。

▽

欧州事情に詳しいジャーナリストの故・柴田俊治氏は著書「地球の味わい」で、日・独を対比している。「ともに清潔好きで働きもの。物づくりの凝りようも似る。日本人の職人気質とドイツのマイスター(親分)への敬意」と述べたうえで、「違いは計画性の有無ではなかろうか」と記す。

ドイツ人は議論好きだそうだ。問題が起きるたびに検討を加え、あっさり方向転換もする。

「最終的には目標に到達し、あとは国も国民も一直線」。手練れの一言が、ドイツの国民性を鮮やかに切り取る。

日本の国民性については、「どちらかと言うと討論べた。我先にはなく横並びになりがちだ。そんなDNAが我々に組み込まれているのではなかろうか」と述べている。